

スコットランド王国の宗教改革前夜(3)

—— スコットランドの近代への途 ——

Era before the Reformation in the mid-16th century of Scotland (3)

—— On the Way to Modern Society ——

久保田 義 弘

要旨と目次

本稿では、16世紀中期のスコットランドの宗教改革前夜の国際情勢の中で、スコットランド王国がイングランド王国とフランス王国に翻弄されながらも、自国のアイデンティティを模索し、スコットランドの自律あるいは自立に政治生命を賭けた国王メアリー女王の時代を調べる。イングランド王国によるスコットランド王国の征服・併合の策謀は、エドワード1世（在位1272年-1307年）やエドワード3世（在位1327年-1377年）に見られるが、しかし、第1次独立戦争（1306年から1328年まで）や第2次独立戦争（1329年から1377年ごろまで）におけるスコットランドの勝利によって回避された。チューダ朝ヘンリー7世の治世下での経済力の伸展をベースにして、ヘンリー8世のフランス侵攻戦略によってイングランド王国による一体化攻勢が再開された。

本稿の最初の節ではメアリー女王がフランスへの脱出し、フランス王妃になり、そして帰国したメアリー女王と王母マリー・ドゥ・ロレーヌの宗教政策と会衆指導層の戦いを概観する。次節では、メアリー女王の再婚と私設秘書ダヴィッド・リッチオならびにダーンリー卿ヘンリー・ステュワートの暗殺と、メアリー女王のイングランドでの陰謀の失敗とメアリーの死を概観する。それと同時に、1560年2月27日にイングランドとの間で結んだベリク協定（Treaty of Berwick）とエディンバラ条約（Treaty of Edinburgh）によって、スコットランドとイングランドの絆が強くなり、フランスとの古い同盟は反古にされ、両国の合同が間近にせまっていた。

（キーワード：一体化政策、手荒な求婚戦争、会衆指導層、第一信仰盟約、ベリク協定、エディンバラ条約、国王至上法、礼拝様式統一法、メアリー女王とジョン・ノックス、メアリー1世の宗教政策、エリザベス1世、エドワード6世）

はじめに

本稿では、16世紀中期の宗教改革前夜のスコットランドの近代化に焦点を当て、イングランド王国の一体化政策に対するスコットランド王国の対応をメアリー女王の王位維持を通じて概観する。ヘンリー7世の治世下での経済力の伸展やヘンリー8世のフランス征服戦略によってイングランドの一体化攻勢が復活し、エドワード6世およびエリザベス1世の治世下でもその一体化政策は一貫して進められた。その結果、1560年にエディンバラ条約が結ばれ、スコットランドはフランスとの古い同盟を破棄させられた。メアリーのイングランド逃亡後、そのカトリック教徒によるエリザベス1世の暗殺陰謀も概観する。

第1節 王母マリー・ドゥ・ロレーヌの宗教政策と会衆指導層

1.1 メアリー女王がフランス女王に

5歳のメアリー女王はフランスに向かった。フランス国王によって送られたフランス艦隊は、1548年8月、5歳の王女メアリー、付き人4人、4人のメアリー¹と共にダンバートン城(Dumbarton Castle)からフランスに向かい、そこに無事に着いた。この渡仏は、将来、メアリー女王がフランスの皇太子フランソワと結婚するためのものであった。彼女は、アンリ2世²(Henry II)(在位1547年-1559年)の宮廷に温かく迎えられた³。1558年5月25日に15歳の王女メアリーは、1つ年下の皇太子フランソワとパリのノートルダム寺院で結婚式を挙げた。アンリ2世の死後、皇太子フランソワがフランソワ2世(François II)(在位1559年-1560年)として即位し、メアリー女王は、16歳でフランス王妃になった⁴。同時に、フランソワ2世がスコットランド国王になったことを意味していた。

¹メアリー女王と同じ年齢の4人のメアリーは、スコットランド貴族であるピートン、シートン、フレミング、リビングストンの貴族の娘であった。シートンは終生メアリー女王に仕え、女王の処刑にも立ち会った。

²アンリ2世は、フランソワ1世と王妃クロード・ドゥ・フランスの次男として生まれた。兄フランソワが急死したため、王太子(ドーファン)の称号を得、1547年に王位に就いた。彼の妹マドレーヌ・ドゥ・ヴァロアはスコットランド王ジェイムズ5世の王妃となった。また、1559年6月30日にアンリ2世の妹マグリットとサヴォイア公、娘エリザベートとスペイン王フェリペ2世の結婚祝宴の一環として、モンゴメリ伯との騎乗槍試合で目を突き抜かれる槍傷をうけた。その傷が原因で7月10日に40歳で急逝した。

³メアリーは、フランス宮廷では、母方の祖母のギーズ公アントワネットに預けられ、散文、外国語、作詩、ダンス、乗馬、音楽、刺繍などの最高の教育を受けた。彼女は、スコットランドでは望むことのできない貴婦人によって教育された。

⁴1560年12月にフランソワ2世が、顔面の悪性の腫瘍から中耳炎を起こし、16歳の若さで他界した。メアリーは、18歳で未亡人になった。2人の間には子供はいなく、彼の死は、メアリーを単なるスコットランド女王という地位に戻した。彼女は、1561年8月にカレーを発って、エディンバラ北西のリースに上陸した。13年振りに故国の地を踏んだ。

イングランド王国では、エドワード6世が結核のために他界すると、キャサリン・オブ・アンゴラの娘メアリーがイングランド王位に就いた。メアリーへの王位継承は、すんなりとは進まなかった。エドワード6世は、カトリック教の復興に繋がるメアリーの王位継承には反対であった。エドワードとそのアドバイザーは、ヘンリー8世の妹(メアリー・テューダ; Mary Tudor)の娘になるジェイン・グレー嬢(Lady Jane Grey)⁵(1536/1537年生-1554年没)(在位1553年7月-1553年7月19日)が王位を継承することをアドバイスした。ジェイン・グレー嬢はノーザンバーランド公ジョン・ダッドレー(John Dudley, 1st Duke of Northumberland)⁶(1504年生-1553年没)の5男ギルドフォード・ダッドレー(Guildford Dudley)(1553年生?-1554年没)と結婚していた。1553年7月10日に初代ノーザンバーランド公とその支持者によってジェイン・グレーが王位に就くと宣言された。この同じ日に、ノーフォークのケニングホール(Kenninghall)に住んでいたメアリーは、枢密院に手紙を差し出し、サフォークのフラムリング城(Framling Castle)に軍隊を集結させた。ジョン・ダッドレーがロンドンを留守にしていた隙に、枢密院はジェインからメアリーに支持を変えた。そのため、メアリーの支持者が増加し、ダッドレーの支持者は激減した。7月19日にジェイン・グレー王は廃され、ジェインとその良人ギルドフォード・ダッドレーはロンドン塔に閉じこめられた。1553年8月3日にメアリーは、ロンドンに勝利の進行で入場した。

⁵ Lady Jane Grey は、初代サフォーク伯ヘンリー・グレイ(Henry Grey, 1st Duke of Suffolk)(1517年生-1542年没)とフランシス・ブランドン(Frances Brandon)(1517年生-1559年没)の長女であった。フランシス・ブランドンがヘンリー7世の末娘メアリー・テューダの娘であったので、ジェイン・グレイは、国王ヘンリー7世の孫であり、国王ヘンリー8世の姪であった。彼女は、献身的なプロテスタントであり、チューリッヒの宗教改革者ハイน์リッヒ・ブルリッガー(Heinrich Bullinger)(1504年生-1575年没)と文通をしていた。彼女は、ジョン・エイルミア(John Aylmer)(1521年生-1594年没)などの一流の人文学者にラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語の教育を受けた。

⁶ ジョン・ダッドレーは、ヘンリー7世の枢密院議員エドモンド・ダッドレー(Edmund Dudley)(1462年あるいは1471/1472年生-1510年没)とエリザベス・グレイ(Elizabeth Grey)(1482年生?-1530年没)の長男である。父エドモンドは、ヘンリー8世が王位を継承したとき、推定反逆罪(constructive treason)で逮捕・処刑されたために、彼はギルドフォード家(Edward Guildford)の被後見人になった。彼は、1525年にギルドフォード家の娘ジェインと結婚した。ダッドレー家は、1530年代の福音主義サークルに属していた。彼らの13人の子供は、ルネッサンス人文主義と科学の教育を受けた。1532年のカレーにおけるヘンリー8世とフランスのフランソワ1世(François I)(在位1515年生-1547年没)との会合に、アン・ブーリンと共に側近として同席した。1534-1536年の宗教改革議会に出席し、1536年のPilgrimage of Grace(恩寵の巡礼)に反対する使節団を送った。1542年のスコットランドとのソルウェイ・モスの戦いの後、スコットランド国境の監視官になり、1544年の手荒な求婚の戦いに参戦し、ハートフォード伯エドワード・シーモアを支えて、イングランドの勝利に貢献した。

ヘンリー8世の後継者エドワード6世の摂政会議の16人の構成メンバーノ一人になり、ハートフォード伯エドワード・シーモアがその議長(護国卿)であった。1549年に独裁的になった護国卿をダッドレー達は会議から追い出し、ダッドレーが摂政のトップになった。彼は、1551年にノーザンバーランド公に昇進し、エドワード6世の政治を指揮した。

メアリー1世 (Mary I)⁷ (在位 1553年-1558年) は、熱烈なカトリック信奉者であり、教皇至上権の復活を唱え、イングランド王国が統一キリスト教 (ローマ・カトリック教) に復帰すると宣言した。彼女の最初の仕事は、ロンドン塔に捕らわれていた3代ノーフォーク公 (Thomas Howard, 3rd Duke of Norfolk) (1473年生-1554年没) などのカトリック教徒を解放することであった。次に、彼女は、異母姉妹のエリザベスに王位を継承させないために結婚し、後継者をもうけることを考えた。従兄弟のスペイン王カルロス1世の長男フェリッペを結婚相手に選んだ。しかし、周囲の者はその結婚に反対した。宮内長官ステファン・ガーディナー (Stephen Gardiner, Lord Chancellor)⁸ (1483年生? / 1497年生? - 1555年没) は、ハプスブルグ家の属国になる危険性を回避することを考え、イングランド人との結婚を求めた。またプロテスタントの人々はカトリック国になることを恐れた。彼女のフェリッペ王子との結婚に反対する反乱が起こった (1554年)。それはウィアットの乱 (Wyatt's Rebellion) であった。これは、メアリーに替えてエリザベスを国王にすることを求めた。ケント州からロンドンについたトマス・ウィアット (Thomas Wyatt the younger)⁹ (1521年生-1554年没) は、サフォーク公 (Henry Grey, 1st Duke of Suffolk) と共に捕らえられた。ウィアット、3代サフォーク公、ジェイン・グレー嬢とその良人ギルドフォード・ダッドレー (Guildford

⁷ メアリー1世 (1516年生-1558年没) は、キャサリン・オブ・アラゴンの5人目の子女であった。先の4人は死産か、幼児期に死亡していた。メアリー自身も病弱であったが、早熟であった。彼女の初等教育の名誉は、彼女の母親キャサリンから生まれた。母親はスペインの人文主義者 Juan Luis Vives (1493年生-1540年没) に教育を頼み、ラテン語での教育が与えられた。彼女は、ギリシャ語、科学、音楽も勉強した。彼女が9歳のときに、ヘンリー8世はウェールズ王子に贈られる特権を彼女に与え、彼女をウェールズ王子と呼んだ。1526年に彼女はウェールズ州の統轄権を与えられた。彼女は、2歳の時、フランスのフランソワ1世 (François I) (在位 1515年-1547年) の息子ブリタニア公フランソワ3世 (1518年生-1536年没) との結婚が約束されたが、しかし、3年後にその約束は破棄された。1533年にヘンリー8世がアン・ブーリンと結婚し、キャサリンとの結婚が無効にされた。メアリーは、宮殿から追い出され、エリザベスの侍女にされた。

⁸ 彼は、ケンブリッジのトリニティで市民法と教会法の研究をした。1520年に市民法の博士、1521年には教会法の博士を取得した。彼は、キャサリンとヘンリー8世の離婚には問題ないと判断していたが、ヘンリー8世の首長法には賛成しなかった。この点で克蘭マーと意見が分かれた。メアリー1世が王位について、彼はロンドン塔から解放され、メアリー1世の誕生の正当性、キャサリンとヘンリー8世の結婚の正当性、さらにカトリック教の正当性、さらに首長法に関する前言の撤回に関する仕事をするようになった。しかし、異端法の成立にガドナーがどれ程関わっていたかは不明である。少なくとも、ジョン・フーパー (John Hooper) (1495/1500年生? - 1555年没) の裁判に彼が関わっていたことは間違いない。だがしかし、彼自身の管区で異端者を焚刑にしたことはなかった。

⁹ 彼はトマス・ウィアット (Thomas Wyatt) (1503年生-1542年没) とエリザベス・ブルーク (Elizabeth Brooke) (1503年生-1560年没) の息子であった。彼の父は、ヘンリー8世の2番目の妃アン・ブーリン (Anne Boleyn) (1501/1507年生? - 1536年没) の恋人であった。ヘンリー8世は、アン・ブーリンを姦通罪で処刑したが、その相手の一人が彼の父トマス・ウィアットであった。息子のトマスは父の妾エリザベス・ダーレル (Elizabeth Darrell) (生没不詳) と恋仲に陥り、息子をもうけていた。彼は、捕らえられ1544年3月15日に裁判にかけられ、その4月11日に処刑された。

Dudley) は処刑された。

彼女の宗教政策を見てみよう。1553年10月に開催された彼女の最初の議会では、ヘンリー8世とキャサリン・オブ・アラゴンの結婚の正当性が宣言され、またエドワード6世の宗教に関する法律を廃案にし、ローマ・カトリック教会とイングランド教会の断絶を無効とし、逆にプロテスタントが無効にされた。彼女は、1554年12月に異端法を議会通過させ、異端法を復活させた。法律によってカトリック信仰に反対する異端の有罪判決者を罰した。その方法は公開法廷で異端嫌疑者を裁いた。実際には、これによって異端者は、スペイン方式の焚刑にされた。有罪者は、まず破門され、次に処罰のために世俗の聖職者に渡された。メアリー1世の体制下で、284人のプロテスタントが処刑され、30人が牢獄死した。そのため彼女は、「ブラッディー女王」と呼ばれた。彼女は、異端法の下で、多くのプロテスタントを迫害し、処刑した。その最初の処刑者は、聖職者あるいは学者であった。

1555年2月4日にケンブリッジ大学で学位を受け、かつ、聖書翻訳者であったジョン・ロジャー (John Rogers)¹⁰ (1500年生?-1555年没)、同年2月8日にローレンス・ソーндラス (Lawrence Saunders)¹¹ (1519年生?-1555年没)、同年2月9日にオックスフォード大学で修士を受け、グロスターとウスター司教であったジョン・フーパー (John Hooper)¹² (1495/

¹⁰ 彼は、バーミンガムのデリテン (Deritton) で生まれた。デリテンの洗礼者ヨハネの Guild School で学び、ケンブリッジ大学のペンブローックコレッジで教育を受けた。1526年にケンブリッジでBAを受けた。1534年にイングランド貿易商会のイングランド商人の牧師としてアントワープに渡った。彼は、そこでウィリアム・ティンデール (William Tyndale) (1492年生?-1536年没) とマイルズ・コヴェルダール (Myles Coverdale) (1488年生?-1569年没) と出会い、カトリックの教えを捨てて、聖書の翻訳を行った。1537年に『トマス・マタイの聖書』が出版された。1540年にウィッテンバーグ大学に入学し、そこでフィリップ・メランクトン (Philipp Melancton) (1497年生-1560年没) などのプロテスタントと親しくなった。1548年にイングランドにもどりマイルズ・コヴェルダールの Considerations of the Augsburg Interim の翻訳を行った。1554年1月にロンドン司教エドモンド・ボンナー (Edmund Bonner, Bishop of London) (1500年生?-1569年没) は彼を Newgate 牢獄に送った。1555年1月にステファン・ガードナー (Stephen Gardiner) (1483年生?/1497年生?-1555年没) の前に呼び出され、ポール枢密卿によって任命された委員会に呼び出され、ガードナーによって死刑宣告を受けた。彼は、カトリックの偶像崇拜や全質変化 (秘蹟) を認めなかった。

¹¹ 彼は、イートン校とケンブリッジ大学のキング・カレッジで教育を受けた。卒業後、貿易商に務めたが、資格を取り、説教した。その後、フォーザーリングのカレッジやリッフィールド大聖堂で職を得た。1555年10月にノーザンバーランドでカトリック教の誤りとメアリー1世によって教会にその誤りが持ち込まれることを説いていたとき、彼は会衆に向かってカトリック教に神の裁きがあることを説いた。ロンドン司教は彼の逮捕を命じた。

¹² フーパーの幼児期についてはよく知られていないが、サマーセット、デボンあるいはオックスフォードの裕福な家庭に生まれたようである。1519年にオックスフォードで修士を受けた。彼は、グロスター修道院でベネディクト修道士あるいはプリストル修道院でシスター修道士であったと思われる。これも何れかよく分からない。1538年にはウィルトシャー (Wiltshire) のリディングトン (Liddington) の聖職者 (修道士) であったと思われる。

1544年に大陸に渡り、1546年にはストラスブルグからチューリッヒ (Zürich) に移り、イングランドに

1500年生?-1555年没),同じ日にローランド・タイラー(Rowland Taylor)¹³(1510年生-1555年没)とジョン・ブラッドフォード(John Bradford)¹⁴(1510年生-1555年没)を焚刑にし,同年10月にケンブリッジ大学のペンブロークカレッジで教育を受け,同大学のプロクターになり,そしてロンドン司教であったニコラス・リドゥリー(Nicholas Ridley)¹⁵(1500年生-1555

戻り財産を引き継ぎ,再び1547年にはストラスブルグに渡り,そこで結婚した。ツウイングリー(Zwingli)の後継者であったハインリッヒ・プリンガー(Heinrich Bullinger)と交遊した。また,彼は,マーティン・ブッカー(Martin Bucer)(1491年生-1551年没),テオドール・ビブリアンダー(Thodors Bibliander)(1509年生-1564年没),サイモン・グリノーウス(Simon Grinaeus)(1493年生-1541年没),コンラッド・ペリカン(Konrad Pellikan)(1478年生-1556年没)とも接触した。1549年5月までにはイングランドに戻り,カトリック主義ならびにルター主義者に対して,スイスのカルヴィン主義の権威者になった。彼は,護国卿エドワード・シーモア(Edward Seymour, 1st Duke of Somerset)(1506生-1552年没)によって礼拝堂牧師に任命された。また,彼はジョン・ラスキー(Jan Laski)(1499年生-1560年没)とも親しく,1549年に司教ボナー(Bonner)裁判でその告訴証人であった。しかし,エドワード6世からメアリー1世の統治に代わると,プロテスタントからカトリックに戻され,妻帯していたために彼は司教職を剝奪された。そして1554年12月に異端法が復活し,異端者は処刑されることになり,1555年2月9日に彼は焚刑に処せられた。

彼は,クランマーの聖職授任式に長い外套と白い法衣を着用して出席することを求められたが,彼は聖書にそれを保証する記述がなく,ユダヤ人やカトリックの名残であるとして,彼はグラスター司教職を辞退した。これをきっかけに祭服論争(Vestmrnts Controversy)が起こった。祭服を着用しなくとも聖職叙任が行われることを主張した。これに対してリドゥリーは議会によって定められた聖職授任式を支持した。

¹³ 1553年7月に逮捕された。このとき彼はサフォーク州ハドリー(Hadleigh)の小さな町の教区牧師であった。彼は,聖書訳者で1536年に焚刑に処されたウィリアム・ティンデル(William Tyndale)の姪と結婚していた。彼は,第1に,ジェーン・グレー嬢の王位継承を支持し,第2に,異端の罪によって逮捕された。この第2の異端の罪とは,全質変化の批判とカトリックの聖職者の独身主義の批判,そして偶像崇拜の批判であった。第1の全質変化とは,聖餐式のパンとワインがキリストの体と血に変化する奇蹟であった。第3の偶像崇拜はミサに置ける偶像であった。この2つの教えは,プロテスタントによって遍く批判された教えであった。彼は,逮捕され,1554年12月の異端法によって焚刑に処された。

¹⁴ 彼は,マンチェスターのブラックリー(Blackley)に生まれ,ロンドン法学院(Inner Temple)で法律の勉強をした。彼は,プロテスタント信仰を知り,1548年にケンブリッジ大学のキャサリン・ホールで神学を専攻した。そして,ケンブリッジのペンブローク・カレッジ(Pembroke College)でフェローになった。1550年に司教ニコラス・リドゥリー(Nicholas Ridley)(1500年生?-1555年没)によって,ランカシャーやチェスター州を移動しながら説教する牧師に叙任された。民衆を扇動した罪で捕らえられ,ロンドン塔に閉じこめられた。

¹⁵ 彼は,ノーザンバーランドのティンデイル(Tynedale)の名声の高い家系の出であった。ニューカッスルのグラマー校で教育を受け,ケンブリッジ大学のペンブローク・カレッジで教育を受けた。1525年に修士を受けた。その後,聖職者になり,ソルボンヌに渡った。1529年ごろにイングランドに戻り,1534年にケンブリッジ大学の準プロクター(proctor)になり,1537年にBDを取得し卒業した。カンタベリー大司教トマス・クランマーによってその牧師に任命された。1540年から51年には彼は,ヘンリー8世専属の牧師の一人にされ,カンタベリー大聖堂の聖職録の地位を提供された。1543年に異端の非難を受けた。1547年に彼はロッチェスター司教にされ,直ぐ後に,彼の管区の教会の祭壇を取り払い,聖餐式(聖体拝領)を行うところにテーブルを設置した。1548年にはクランマーの共通祈禱書の編纂を手伝い,大司教ガーディナルやエドワード・ボナーの審査委員会の一人であった。彼らを執務から排除した。1553年にエドワード

年没),ウスター司教でエドワード6世の宮廷牧師であったヒュー・ラティマー(Hugh Latimer)¹⁶ (1487年生?-1555年没),さらに1556年にカンタベリー大司教のトマス・克蘭マー(Thomas Cranmer) (1489年生-1556年没)までも焚刑で処罰が含まれていた。メアリー1世の宗教政策は,異端者を焚刑にすることでローマ教皇とイングランド王国の連携を強化するものであった。

300人に近い処刑者の中には,聖職者あるいは聖書研究者のみではなく,多くの職人あるいはその関係者がいた。彼らは,英語に翻訳された聖書を読み,その研究を通してカトリック教会の教えである偶像崇拜,聖職者の結婚の禁止,さらに聖体拝領すなわち全質変化が聖書に記述されていないことを知り,カトリック教会から離れて,プロテスタントの教えを信じるようになっていった。メアリー1世は,1553年7月に王位を継承し,1554年12月に異端法を復活させ,異端者を処刑することを議会での決定に基づき,聖職者,つぎに世俗のプロテスタントのキリスト者を焚刑に処した。絹織り職人のウィリアム・ハンター(William Hunter) (1555年没)は,カトリックの聖体拝領のうけ入れを拒み,聖書を読んでいるところを見つけ,処刑された。彼は19歳であった。サフォーク州イプスウィチ(Ipswich)のなめし革職人のウィリアム・パイク(William Pyke) (1556年没)は,禁書になっていた翻訳聖書(Matthew Bible)の研究をしていた。彼は,聖書読書会に参加しているとき,その40人ほどの仲間共に逮捕され,1556年7月にブレントフォード(Brentford)において処刑された。サフォーク州ウッドブリッジ(Woodbridge)の農夫の娘アリス・ドライヴァー(Alice Driver) (1558年没)は,聖書を読み,カトリックの聖体拝領(全質変化)が偶像崇拜であり,キリストの教えに反すると考えるようになり,教会に行かなくなった。彼女は,聖職者によって判事に差し出され,1558年11月にイプスウィチで焚刑にされた。東サセックス州のワルブルトン(Warbleton)の鉄職人リチャード・ウッドマン(Richard Woodman) (1557年没)は,聖メアリー教会(St Mary the Virgin Church)で,彼をプロテスタントであるという説教者を批判したために逮捕された。1557年6月に彼はLewesで焚刑にされた。ダービー州の盲目

6世が死ぬと,彼は,ジェーン・グレー嬢が王位を継承する証書にサインした。しかし,メアリー1世が王位を継承し,彼は,逮捕されロンドン塔に監禁された。彼はオックスフォードのBocadrdo牢獄に移され,処刑された。

¹⁶ 1524年のケンブリッジ大学の神学部での修士学位における彼の討論の主題は,新教の教義(フィリップ・メランシトンの教義)を論駁することであった。彼は,頑固なカトリック教徒であったが,しかし,トマス・ビルニー(Thomas Bilney) (1485年生?-1531年没)の信仰告白(イエス・キリストが唯一の救い主であるという信仰)によって,新教に転向することとなった。1535年に彼は,ウスター司教に就任したが,その管区では新教の教えと偶像崇拜反対を推進した。1539年にはヘンリー8世の6箇条規約(Six Articles)に反対し,彼は司教職を辞めさせられ,ロンドン塔に閉じこめられた。彼は,エドワード6世の治世下でイングランド教会がプロテスタントの方向に向かうにつれて支持を回復させたが,メアリー1世の治世のもとでは彼の信仰とオックスフォードでの彼の教えが裁きかけられ,1555年に焚刑に処せられた。

の女性ジョアン・ウエイスト (Joan Waste) (1534年生-1556年没) は、新約聖書を購入し彼女の友人に読むことを頼んだために処罰された。彼女は、また、全質変化を否定し、カトリックの礼拝を拒み、ダービーのウィンドヒル・ピットで処刑された。彼女は、ロープで火の上に吊され、ロープが火で焼け、火の中に落ちた。良人が靴職人のアグネス・ポテン(Agnes Potten) と良人がビール醸造職人のジョアン・トランクフィールド (Joan Trunchfield) は、妻帯の罪で牢獄に入れられた聖職者ロバート・サムエル (Robert Samuel) (1555年没) を助けたために、逮捕され処刑された。

スコットランドでは異端者が焚刑に処される例は極少なく、聖職者以外の世俗の民が焚刑にされることはなかったと伝えられている。スコットランドの宗教改革は、教会内で進められ、聖職者以外の世俗の人々の生活に大きな影響を与えなかったのであろうか。この問題は別の機会に考察する。

1558年11月にメアリー1世が他界し、ヘンリー8世の2番目の王妃アン・ブーリンの娘であったエリザベス1世 (Elizabeth I)¹⁷ (在位1558年-1603年) が王位に就いた。イングランド女王メアリー1世とスペイン王フェリッペ2世 (Felippe II) (在位1556年-1598年) (1527年生-1598年没) は、エリザベスが王位を継承することに同意したと思われる。もしそれに反対し拒否すれば、スコットランド女王メアリーに王位が移り、彼女はフランス皇太子フランソワと結婚することになっていたため、フランス王妃になるメアリーがイングランド王位を継承すると、フランス王国と敵対していたスペイン王国はイングランド王国との同盟関係を失うこととなり、スペイン王国はフランス王国、イングランド王国、スコットランド王国を敵に回すことになる。エリザベスが王位を継承することによって、スペイン王国の孤立が回避された。この王位継承に対しフランス王アンリ2世は、庶子であるエリザベスの王位継承に疑義を申し立て、息子フランソワの嫁メアリーに正当なイングランド王位継承権があると提唱した。これに対処するために、イングランド議会は、エリザベスを嫡出子と議決した。メアリー女王の祖母はテューダ・マーガレットであり、マーガレットはヘンリー8世の姉であったため、メアリー女王にもテューダ王家の継承権があった。それに対し、エリザベスはヘンリー8世によって結婚無効が宣言されたアン・ブーリンの子であったため、後にイングランド王メアリー1世になるメアリーと同様に庶子と扱われていた。当時、庶子には王位継承権はなかった。エリザベスは、ヘンリー8世とその2番目の王妃アン・ブーリンとの間で、結婚式を挙げる前に生まれていた非嫡子であった。彼女は、アン・ブーリンの処刑後には、

¹⁷ 彼女は、内政面では絶対主義、外交面では海外進出の基礎を築き、文化面ではイギリス・ルネッサンスの花を咲かせた国王であった。彼女は、女ヘンリー8世と言われた。彼女は、玉璽にアイルランド王国を示す「ハープ」をイングランドの紋章に加えた。それが正式に採用されたのは、ジェームズ1世によってであった。

姉メアリーと同様にプリンセスの処遇を停止され、王位継承権を剥奪された。スコットランド女王メアリーとイングランド女王エリザベス1世の闘いは、エリザベス1世の王位継承時から始まっていた。メアリーがスコットランド王国を追われイングランド王国に逃亡すると、イングランド王国におけるカトリックの復興を目指す貴族とメアリー女王の連携による陰謀事件が多発する。

エリザベス1世が王位を継いだとき、彼女は異母姉メアリー1世のカトリックあるいは異母弟エドワード6世のプロテスタントの何れを継承するのかの選択に直面した。イングランド王国が何れの宗教を取るかが彼女の初期統治の重要事項であった。彼女は、国務長官ウィリアム・セシル(William Cecil) (1521年生-1598年没)と国璽尚書ニコラス・ベーコン(Nicholas Bacon) (1510年生-1579年没)の助言によって彼女の宗教政策を推進したと思われる。議会では、宗教改革法案とイングランド教会のローマからの独立が議論された。その法案では、聖餐式についてはカトリック方式¹⁸ではなくプロテスタント方式が取り入れられ、聖職者はカトリックの法衣を着ない¹⁹こととされ、牧師の結婚が許され、教会から偶像が取り払われ、エリザベス女王をイングランド教会の最高統治者とした。この法案はローマ・カトリックの司教や貴族に反対された²⁰が、「国王至上法(Act of Supremacy)と「礼拝様式統一法(Act of Uniformity)」は議会を通過した。その政策は、この2つの法で示される。その政策原理は、両極端を排除し、宗教の中身を曖昧にすることであった。それによってエリザベスは、多くの国民(臣民)の支持を得るイングランド教会の構築を目指した。彼女は、カトリックとプロテスタントの両極端を避けて、第3の宗教(アングリカン教会)を選択し、「国王至上法」と「礼拝様式統一法」を軸とする宗教政策を採った。「国王至上法」によって示されたイングランドのナショナルリズムは、信仰に関して、教皇至上権によって示されるローマ・カトリック教会の普遍主義とは対立した。この法によって、カトリック司教は職を失い、多くの高僧は宣誓を拒否し辞職した。それに代わって改革を支持する聖職者が任命された。エリザベスは、国家に対する教会の従属の立場を取ったが、同時に、カトリック教会の組織形態(司教と聖職者階級制度による教会統治)は残した。この法によって、何が異端であるかの定義が与えられ、エリザベス女王をイングランド教会の最高統治者にし、さらに、外国の王、聖職者、あるいは国家の権威を宣誓する²¹ことを罰した。「礼拝様式統一法」は、ローマ・カトリッ

¹⁸ これは、カトリックの聖餐のパンと葡萄酒をキリストの肉と血に変える全質変化のことである。

¹⁹ 議会解散後、エリザベスとセシルは、カトリックの抵抗を和らげるためにか、あるいは、それに譲歩してか、エリザベスの宗教法を変更した。例えば、聖餐式においての法衣の着用が命じられ、通常のパンは駄目だが、ウエハーを聖餐式に使うことは許された。

²⁰ カトリック議員は、聖餐式的全質変化を許す礼拝式を申し出、またエリザベス女王をイングランド教会の最高統治者にすることは反対した。

²¹ これは、イングランドのローマ・カトリックにとっては衝撃であった。というのは、カトリック教徒がロー

クに反対する厳しい法を廃止し、祈祷書からローマ教皇に対する悪口を取り除き、そして聖餐式における実際のキリストの肉体と血を主観的に信じることのできる曖昧な表現にし、一般国民（臣民）がアングリカン教会に加わることを狙った。また、この法によって、全ての人に日曜礼拝（一週に一回教会）に行くことを強制し、礼拝に行かないものには罰金を課し、日曜礼拝参加者の増加を狙った。この共通祈祷書（The Book of Common Prayer）に解釈の多様性を与えることによって、国教会（アングリカン教会）は大衆に受け入れられたと思われる。

1570年のローマ教皇ピウス5世（Pope Pius V）（在位1566年-1572年）の勅書では、エリザベス女王を膺のイングランド国王であるし、彼女を破門することが述べられた。この勅書以後、エリザベス1世のカトリック教に対する態度が硬化し、彼女の治世の後半にはカトリック教徒の迫害がなされた。

1.2 王母マリー・ドゥ・ロレーヌ（メアリー・グース）の宗教政策と会衆指導層

メアリーの母親であり、彼女の摂政であったマリー・ドゥ・ロレーヌ（マリー・ギーズあるいはメアリー・ギーズ）は、2代アラン伯を退けて、1554年にメアリー女王の摂政に就いた²²。彼女の外交政策はフランスよりであり、イングランドを退けるものであった。そのような外交政策を採ったのは、フランスとの古い同盟があっただけではなく、彼女がフランスのギーズ家（The House of Guise）²³の出身であったからであろう。

16世紀中頃には、スコットランドでも宗教問題は深刻になってきた。スコットランド王国ではヨーロッパ大陸の国々と同様に、プロテスタントとカトリックの闘いと対立が深まっていた。会衆指導層（The Lords of the Congregation）は、第一信仰盟約（The First Covenant）を結んでいた。これは、プロテスタント信仰を誓う盟約書であった。1557年12月に、有力貴

マ・カトリシズムの権威を否定することを誓うことになるからであった。ローマ教会は外国の裁判権にあり、外国の権力であった。エリザベス女王は、初め、フランスやスペインの侵攻の恐怖のために、カトリックに寛容であったが、国内のカトリックの力が弱まった統治後半には、カトリック者が要職につくことを禁止し、その土地や財産を奪った。カトリック殉教者が発生した。1562年のSupremacy of the Crown Actによって、国王への宣誓拒否を大逆罪とした。

²² アラン伯にフランスのキャトルロー公（Duchy de Châtellerauld）を与えることによって買収した。

²³ ギーズ家は、フランソワ1世の侯爵であった。ギーズ家はクロード・ロレーヌ（Claude of Lorraine）（1496年生-1550年没）によって開かれた。メアリー・ギーズ（Mary of Guise）はその娘であった。彼女には2人の弟がいた。軍人で政治家であったフランシス（Francis of Lorraine）（1519年生-1563年没）と、枢機卿（Cardinal of Lorraine）のシャルル（Charles of Lorraine）（1524年生-1574年没）であった。ギーズ家は熱心なカトリック教徒であった。そのため、新教徒のユグノーとは常に対立した。カトリック同盟の盟主となり、プロテスタントに寛大なメディチ家のキャサリン（Catherine de Medici）（1519年生-1589年没）の政策に反対した。

族の5代アーガイル伯アーチボルド・キャンベル (Archibald Campbell, 5th Earl of Argyll) (1532 あるいは 1537 年生-1573 年没), 4代モートン伯ジェイムズ・ダグラス (James Douglas, 4th Earl of Morton) (1525 年生?-1581 年没) ならびに 5代グレンケアン伯アレグザンダー・カニングアム (Alexander Cunningham, 5th Earl of Glencairn) (1574 年没) らが中心になってまとめた盟約書であった。これには初代マリ伯ジェイムズ・ステュワート (James Stewart, 1st Earl of Moray) (1531 年生-1570 年没) も参加していた。この盟約に署名した人たちは、国民的教会の創設を目指し、新しい聖書の採用と英語で書かれた公式祈祷書による礼拝を求めた。

反フランスであり、プロテスタント派の会衆指導層は、ジョン・ノックス (John Knox) (1513 年生?-1572 年没) などの宗教改革者達と連携し、12,000 人の隊を形成し、スコットランドからフランスを追放する運動を繰り広げた。1559 年 5 月 11 日にパースのセント・ジョン教会でジョン・ノックスが偶像崇拜を攻撃する説教を行った。この説教を受けてパースでは暴動が起こった。パースに始まった宗教的暴動は、教会の飾り付け祭具を破壊し、フランシスコ修道院、ドミニコ修道院、カウトウジオ修道院に押し掛け、略奪行為に発展し、1559 年の間はエディンバラを占拠した。マリー・ドゥ・ロレーヌ達はダンパー城に退居した。

先に進む前に、ジョン・ノックスについて説明しておこう。彼は、ハディングダンに生まれ、聖アンドリュース大学を卒業し、公証人であったところに、カルヴィニズムの影響を受けて帰国したジョージ・ウィシュアート (George Wishart) (1513 年生-1546 年没) に出会い、彼の教えを受け継いだ。1546 年にウィシュアートが焚刑に処されると、彼は、改革派と一緒に大司教デイヴィッド・ビートンを血祭りにあげ、聖アンドリュース城に籠城したが、1547 年 7 月に母王マリー・ドゥ・ロレーヌが求めたフランス軍の援軍に逮捕され、2 年間、ガレー船の漕ぎ手として鎖に繋がれる苦役を経験した。そこから釈放された後、スコットランドには戻らず、プロテスタントが容認されていたイングランドに行き、エドワード 6 世の宮廷牧師を勤めたが、イングランド王メアリー 1 世の反プロテスタント政策の結果、再度ヨーロッパに亡命した。亡命中にジョン・カルヴィン (John Calvin) (1509 年生-1564 年没) に会い親交を深め、彼は、偶像崇拜に抵抗する信仰に行き着いた。

また、その暴動では会衆指導層は、ホーリールード宮殿を確保し、造幣局から造幣設備を奪った。これに対し、メアリー女王の摂政の王母マリー・ドゥ・ロレーヌ (マリー・ギーズ) は、その暴徒化した市民を処罰するためにスターリングに政府軍を結集させ、パースにその軍を向ける準備をした。これに対して、会衆指導層もローランド地方から貴族とレルドの軍を呼び集め、政府軍に対峙した。フランス王アンリ 2 世 (Henry II) (在位 1547 年-1559 年) はすでに他界していたが、会衆はフランス軍に何の抵抗もすることなく降参すると、リースにフランス軍が入ってきた。会衆指導層は、勝つ見込みのない戦いよりもエディンバラから

の撤退と協定締結を強いられた。その結果が、リース・リンクス (Leith Links) でのリース協定 (Treaty of Leith) (1559年7月25日) であった。

この協定での同意事項は、第1に、会衆指導層はエディンバラから離れ、造幣局から奪った造幣設備 (coining-iron) をその造幣局長 (Master Robert Richardson) に戻し、ホーリールード宮殿を管理人 (James Balfour) に明け渡し、そしてルースヴェン卿 (Lord Ruthven) と Pitarro のレルドを人質として残すこと、第2に、会衆指導層は、宗教問題を除いて、メアリー女王、フランスのフランソワ2世、摂政および法律に従うこと、第3に、会衆指導層は、聖職者、その財産およびその職階を妨げることなく、教会や修道院に対して武力行使をしないこと、第4に、エディンバラは、それ自身の宗教形態を選び使用し、その居住者は1560年1月10日まではその良心に従うこと、そして、第5に、女王の摂政はプロテスタント牧師やその信徒を苦しめないこと、から構成されていた。この協定に従って、会衆指導層はエディンバラからスターリングに撤退した。フランス軍は摂政を支えるために駐留した。会衆指導層はそのエディンバラ駐屯を協定違反であるとしたが、実際には、その協定にはフランス軍がエディンバラから撤退するとう条項はなかった。

会衆指導層は、1560年2月27日にイングランドとの間で結んだベリク協定 (Treaty of Berwick) によって、エリザベス女王によるイングランド王国からスコットランド王国への軍事的支援を仲介することができた。この協定は、エリザベス女王の代表とスコットランドの会衆指導層の間で締結された。会衆指導層の代表は、初代マリ伯ジェイムズ・ステュワート (James Stewart, 1st Earl of Moray), 3代ルースヴェン卿パトリック・ルースヴェン (Patrick Ruthven, 3rd Lord Ruthven) (1520年生?-1566年), ジョン・マックスウエル (John Maxwell) (生没不明), ウィリアム・メイトランド (William Maitland) (1523年生-1573年没), ピタロー (Pitarro) のジョン・ウィシュアート (John Wishart) (1576年没), ハルヒル (Halhill) のヘンリー・バルナヴェス (Henry Balnaves) (1512年生?-1579年没) であった。イングランドの代表は、4代ノーフォーク公トマス・ハワード (Thomas Howard, 4th Duke of Norfolk) (1536年生-1572年没) であった。この協定は、1560年8月にスコットランド議会で批准された。この協定によってベリクのイングランド軍を北のリースまで移動させ、リースのフランス軍の包囲を解くことができた。

この協定は、フランス軍をスコットランドから追い払い宗教改革を実行しようとしていた会衆指導層には重要であった。1560年8月の宗教改革スコットランド議会でその協定が批准され、会衆指導層の目論見は実現した。この協定は、イングランドと会衆指導層との間での軍事協定の様相を帯びていた。例えば、その協定では、スコットランドはイングランド軍を支援すること、全てのフランスの要塞は崩壊され、4代ノーフォーク公トマス・ハワードに引き渡すこと、フランスのイングランド侵入を妨げる手助けをすることなどが含まれていた。

また、その協定にはフランスとスコットランドの古い同盟に代わってイングランドとスコットランドの一体化を目指す方向性もあった。例えば、イングランドの全ての敵は、イングランドおよびスコットランドの敵であるとか、スコットランドは、メアリーとフランソワの結婚以外にフランスと一体化しないと、エリザベス女王はスコットランドとの結合のために極力迅速に軍隊を送ることなどが含まれていた。この協定の締結に際してスコットランドは6人の人質をイングランドに差し出している。これは、会衆指導層がイングランドに従属することを意味していると思われる。

イングランド国王とフランス国王の対立に翻弄され、同時に両国に頼ってきたスコットランド王国であったが、1560年にジョン・ノックスなどのプロテスタント信奉者による教会破壊、聖像の打ち壊し、掠奪などの暴動がおこり内乱状態になったとき、プロテスタント側はイングランドに加勢を求め、マリー・ギーズの旧守派はフランスに援軍を求めたので、スコットランドの宗教問題にイングランド軍とフランス軍が介入し、一種の戦争状態に発展した。先に説明した会衆指導層とイングランドの間のベルク協定によって、ベリクからリースにイングランド軍が入り、戦争状態になった。イングランド軍はリースを包囲していたフランス軍に撃破され、イングランド王国とフランス王国との間でエディンバラ条約 (Treaty of Edinburgh)²⁴ あるいはリース条約 (Treaty of Leith) が締結された (1560年7月7日)。この条約交渉中にマリー・ギーズが病死し、フランスの交渉委員が意気消沈したため、その条約は、フランスにとって不利な内容になっていたと思われる。このときのイングランド王国の代表は、ウィリアム・セシル (William Cecil) (1521年生-1598年没) とカンタベリーとヨークの首席司祭であり、他方、フランス王国の代表は、Charles de la Rochefoucault とヴァレンシーの司教であった。この条約締結によって、イングランド軍とフランス軍がスコットランドから撤退し、両国を巻き込んだスコットランド王国内でのカトリックとプロテスタントの間の内乱が終結した。また、この条約によって、フランス軍のスコットランドへの軍事介入を禁止し、13世紀からのフランスとの古い同盟は廃止された。また、メアリー女王によるイングランド王位継承権を示す紋章の使用を禁止する条項が、エリザベス女王の強い要求によって、取り入れられた。

1.3 メアリー女王の帰国

1560年12月に、フランソワ2世 (Francois II) (在位1559年-1560年) が顔面の悪性の腫

²⁴ この条約はメアリー女王によっては批准されなかった。それは、彼女がフランス最良であったからか、会衆指導層を王母マリー・ギーズに対する反乱であると見ていたからか、エリザベス女王をイングランド王と認めることになると考えていたからであろうか。

瘍から中耳炎を起こし、16歳の若さで他界した。その後、メアリー女王は13年振りに母国スコットランドの土を踏んだ。スコットランド王国では、既に、プロテスタントが幅を利かせ、親英派が多く、メアリー女王を歓呼の声で迎え入れる雰囲気にはなかった。既に前節で説明したように、そのころのスコットランドでは、ジョン・ノックスが精力的に各地方で新教義の説教を繰り広げ、スターリング、リンリスゴウ、パース、セント・アンドリュースなどの中部スコットランドの各地で群衆による教会の破壊、聖像の打ち壊し、掠奪が横行し、暴動、内乱の様相を呈していた。また王母マリーが他界し、エディンバラ条約によって「古い盟約」は破棄同然になり、スコットランドはプロテスタントへの道を歩み始めていた。1560年12月に、エディンバラ条約会議はローマ教皇の権威を否定し、ラテン語によるミサが禁止された。

メアリー女王がホーリールードハウス宮殿 (The Holyroodhouse Palace) に落ち着いたとき、メアリー女王は、その雰囲気に馴染めなく、違和感を覚えていた。フランスでは耳にできなかった異様な歌声はプロテスタント達によるものであった。その雰囲気は、カトリックのメアリーにとって異教のただ中にいると感じられたと思われる。しかし、エディンバラ城では、メアリーは、カトリック方式の礼拝を押し通し、彼女に改宗をせまるジョン・ノックスを宮殿に招き論争し、逆にノックスに改宗を迫った。改革当初のプロテスタントの信仰基盤は、「第一規律書 (First Book of Discipline)」と「信仰告白 (The Confession of Faith)」によっていた。これは、1560年のエディンバラの宗教議会で承認されていた。このように宮廷内のプロテスタントとカトリックの貴族達が鎬を削るなかで、メアリー女王は、義兄であり、第一信仰盟約 (The First Covenant) にも加わった初代マリ伯ジェームズ・ステュワート (James Stewart, 1st Earl of Moray) を枢密院顧問の一人にした。彼は、父ジェームズ5世とアースキン家のマーガレットとの間に生まれた庶子であった。彼は、メアリー女王とダーンリー卿ヘンリー・ステュワートとの結婚に反対し、エリザベス1世に結婚阻止を要請した。エリザベス1世は、ダーンリー卿の母マーガレット・ダグラス (ヘンリー8世の姉の娘であり、チューダー朝の王位継承者でもあった) をロンドンに呼び、ロンドン塔に幽閉した。また、彼は、リッチオ殺害に加担したと考えられる。また、メアリーは、プロテスタントのウィリアム・メイトランド (William Maitland of Lethington) (1525年生-1573年没) をもう一人の枢密院顧問にして、国政の助言を求めた。彼は、メアリー・フレミング (4人のメアリーの一人であり、メアリー女王とともにフランスに同行した) と結婚し、メアリー女王の異母姉弟であった初代マリ伯ジェームズ・ステュワートを支持し、プロテスタントであったがジョン・ノックスに対抗した。また、彼は、David Riccio の謀殺に加担し、さらにメアリー女王の愛人であるというデマを流され、1567年にメアリー女王がイングランドに逃亡した後、新しい政府の一員になったが、メアリー女王のための党派を作り、彼女に勢力を与えようとした。さらに、彼は、サー・ウィリアム・カーコルディと共にエディンバラ城に

入り、その城をメアリー女王の本拠地にしようとしたが、イングランドから援軍を呼び入れた4代モートン伯ジェイムズ・ダグラス (James Douglas, 4th Earl of Morton) (1516年生? - 1581年没) によってエディンバラ城の明け渡しを余儀なくされた。メアリー女王は、宗教改革には寛大な態度²⁵をとり、プロテスタントを抑圧する政策は採らず、宗派や政治的派閥を超越し、信仰の選択には寛容をもって臨むことを宣言した。その一例を挙げておこう。ハイランド地域の有力貴族であったカトリックの4代ハントレー伯ジョージ・ゴードン (George Gordon, 4th Earl of Huntly) (1514年生-1562年没) が、メアリー女王にインヴァネス城の門を閉ざし、王権を侮辱した。このとき、メアリー女王軍は、インヴァネス城を崩壊させた。メアリー女王に彼はアバディーンに呼び出されたが、それに応じずにアバディーンに軍隊を進め、その近くで、メアリー女王の異母姉弟であった初代マリ伯ジェイムズ・ステュワート軍と戦闘になった。これは、Battle of Corrichie (1562年) として知られている。この反乱を起こした4代ハントレー伯は、カソリック教徒で摂政議会の一員であり、さらに1546年にはChancellorになっていたが、捕らえられた。後に、彼は脳溢血のために死亡し、彼の息子がアバディーンで処刑された。

メアリー女王には、国政統治の能力がなく、彼女を牽引する力のある護国卿 (貴族) が必要であった。メアリー女王の統治能力の欠如が彼女を不幸にし、彼女をしてイングランド王権の継承に拘泥させたのかも知れない。

第2節 メアリー女王の再婚と私設秘書ダヴィッド・リッチオならびに ダーンリー卿ヘンリー・ステュワートの暗殺

2.1 メアリー女王の再婚と私設秘書ダヴィッド・リッチオ

メアリー女王は、牽引力のある護国卿 (貴族) 捜しでは、女王とは思われない軽率な態度をとり、そして早々に結婚を決定した。彼女は、牽引力のある人がそばにいて初めて能力を発揮できることを自覚していたので、王国を統治する能力のある相手を探し始めた。最初の相手は、1565年にダーンリー卿ヘンリー・ステュワート (Henry Stuart, Lord Darnley) (1545年生-1567年没) であった。ダーンリー卿ヘンリー・ステュワートは、レノックス伯 (Matthew Stewart, 4th Earl of Lennox) (1516年生-1571年没) 夫人マーガレット (Margaret Douglas) (1515年生-1578年没) の息子であった。マーガレット・ダグラスの母親はマーガレット・テューダであったので、レノックス伯のマーガレット夫人はジェイムズ5世の異父妹であった。メアリー女王の祖母マーガレット・テューダは、祖父ジェイムズ

²⁵ メアリー女王とジョン・ノックスとを巡る宗教問題やスコットランドの宗教改革については別稿にて展開する。

4世没後に、6代伯アンガス伯アーチボルド・ダグラスと再婚し、その間に生まれたマーガレットがダーンリー卿ヘンリー・ステュワートの母であったので、ダーンリー卿ヘンリー・ステュワートは、メアリー女王の従弟であった。ダーンリー卿は、母系でチューダ王家に繋がり、父系でステュワート王家に繋がっていた。

そのために、イングランド女王エリザベス1世は、メアリー女王とダーンリー卿の結婚には反対であった。メアリーが知り合ってほんの4か月後に彼と再婚したこと、またダーンリー卿がステュワート王家の先祖の後継者であったからであろうか、軽率にもローマ教皇の特許状²⁶を受けずに結婚をしたことから判断するに、統治者の結婚としては全く常識を欠いた決定であった²⁷。そのことは、結婚後半年も経たないうちに、ダーンリー卿との間が冷え込んだことから立証される。メアリー女王とダーンリー卿との結婚生活は、ダーンリー卿の横柄な態度や王資格による権力指向のために、うまくいかなかったと想像される。その証拠として、メアリー女王は、音楽家であり、彼女の私設秘書であったダヴィッド・リッチオ (David Riccio / David Rizzio) (1533年生-1566年没)を重用し、寵愛し、ダーンリー卿に約束した王位を引っ込めている。しかし、嫉妬に駆られたダーンリー卿と貴族達は、妊娠中のメアリー女王と共にホーリールード宮殿で彼女の隣にいたりリッチオを女王の面前で殺害した²⁸。その後、この殺害によって、メアリー女王とダーンリー卿の離婚は必然的になった。1566年6月、メアリー女王は男子（この子が後にスコットランド王ジェームズ6世、すなわちイングランド王ジェームズ1世に）を出産した。

メアリー女王はダーンリー卿を避ける生活を送っていたが、他方で取り巻きの貴族達はスコットランド王国の統治にとって、ダーンリー卿を排除しなければならないと話し合っていた。1567年2月10日に、エディンバラ教会のカーク・オ・フィールトのプロヴィスツ・ロッジで爆発がおこり、その中庭でダーンリー卿が死んでいた。この首謀者がボスウェル伯ジェームズ・ヘバーンであるという風評が流れ、さらに首謀者はボスウェル伯であるという張り紙さえ出された。

メアリー女王は、ダーンリー卿との結婚によってスコットランド王国のみならず、イングランド王国の王位の継承を狙っていたのかも知れないが、しかし、その戦略がスコットランドでのプロテスタントの勝利に導き、彼女の王位の廃位と逃亡に導いた。

²⁶ 当時、従兄弟どうしの結婚には、教皇の特許状が必要であった。

²⁷ メアリー女王は、王族にしか与えられないロス伯、オルバーニ公の公爵位をダーンリー卿に与えたばかりではなく、王位をさえ彼に与える約束をしていた。この王位に関する女王の処遇には、有力貴族の反発を買い、政治顧問のジェームズは憤慨し、職を辞し、女王メアリーとダーンリー卿の敵に回った。

²⁸ 1566年3月9日、ホーリールードハウス宮殿で食事中に、ダーンリー卿の部屋に近い接見室の前でリッチオ (David Rizzio) が殺害された。

2.2 メアリー女王の3度目の結婚とダーンリー卿ヘンリー・ステュワートの暗殺

次のメアリーの結婚相手は、彼女のもとに足繁く通っていた貴族である4代ボスウェル伯ジェームズ・ヘバーン (James Hepburn, 4th Earl of Bothwell) (1535年生-1578年没) であった。彼は、女たらしであった。1566年に彼は、4代ハントレー伯ジョージ・ゴードン (Goerge Gordon 4th Earl of Huntley) (1514年生-1562年没) の娘ジャン・ゴードン (Jean Gordon, Countness of Bothwell) (1546年生-1624年没) と結婚したが、彼女の召使いとボスウェル伯の姦通を申し立てられ、1年で結婚を解消した。1560年に、彼がフランス宮廷を訪れたときに、彼は、フランソワ2世とメアリー王妃にあった。1561年に、フランスのガレー船でメアリー女王がスコットランドに戻るときに、その船の手配は4代ボスウェル伯によってなされた。彼は、メアリー女王に気に入られ、側近第1号として扱われた。メアリー女王は、ダーンリー卿の殺害首謀者であると思われた寵臣ボスウェル伯を処罰するどころか、彼に領地を加増し、オークニ公爵位 (Duke of Orkney) を与えた。1567年4月に枢密院は、ダーンリー卿の殺害に対して、4代レノック伯ジェームズ・ステュワートの請願によって、4代ボスウェル伯の訴訟手続きをはじめ、正午から夕方7時まで審議し、ボスウェル伯の無罪が確定した。少なくとも議会の9人の司教と8人の伯爵と7人の侯爵によって署名された Ainslie Tavern Bond と知られているマニフェストをボスウェル伯に手渡した。このマニフェストは、4代ボスウェル伯の無罪の件とメアリー女王は、スコットランドの臣民と結婚する主旨のことが記されていた。

ボスウェル伯は、スターリングからエディンバラに戻るメアリー女王を拉致し、ダンバー城に連れて行き、レイプし、彼女に結婚を迫った。初めメアリーは、即答せずにいたが、1567年5月にプロテスタント宗旨に従って、ホーリールードハウス宮殿で、両人は結婚式を挙行了した。カトリックのメアリーがプロテスタントの夫の宗旨に従っての挙式であった。この結婚によってダーンリー卿の暗殺にメアリー女王自身が関係していたと疑われることになった。実際、メアリー自身もその暗殺に関与していたと考えられる。

その結婚に反対する貴族は、スターリングに結集し、メアリー女王をボスウェルから救い出す軍を起し、2人はスコットランドの城から城へと転々と逃げ回るが、結局、1567年7月24日にメアリー女王は、王位を廃位させられた。2人は、ホーリールードハウス宮殿から安全なエディンバラ城に移ろうとしたが、その衛兵に入城を拒否され、南ロージアのボースウィック城 (Borthwick Castle)、クライトン城 (Crithon Castle)、ダンバー城 (Dunbar Castle) と逃げ回るが、1567年6月15日にエディンバラ城の東13キロメートルのカーベリー・ヒル (Carberry Hill) で4代ボスウェル伯の自由な行動を約束するという条件で、メアリー女王は反ボスウェル軍に投降した。4代ボスウェル伯は、逃走した。

1567年6月16日に、メアリーはパースの南20キロメートルのロッホリーヴァン城 (Loch

Leven Castle) に移され、息子ジェイムズのために退位すること、ジェイムズの教育を貴族に任せること、マリ伯ジェイムズ・ステュワートを摂政にすることを条件として、7月24日にメアリーの王位は廃位された。

王位は、その子のジェイムズ6世(在位1567年-1625年)に継がれた。捕らわれていたメアリー女王は、1568年にロッホリーヴァン城(Lochleven Castle)から脱出し、6,000人の兵を集め、軍をおこした。グラスゴー北方のラングサイドの戦い(Battle of Langside)で、メアリー女王は、初代マリ伯ジェイムズ・ステュワートの軍に敗れ、イングランド王国に敗走した²⁹。この戦いは、スコットランドの歴史においても奇妙な戦いであった。メアリー女王と初代マリ伯ジェイムズ・ステュワートの2人は、異母兄妹であった。初代マリ伯は、ジェイムズ5世の妻子であった。この戦いは皇族間での争いであった。また、ジェイムズ・ステュワートはプロテスタントであった。メアリー女王は、カトリックのハミルトン伯のもとにロッホリーヴァン城を脱出し、逃げのびてきたと思われる。初代マリ伯が戦いに勝利した。

2.3 メアリー女王の敗走とイングランドでの陰謀の失敗：メアリーの死

1568年4月にメアリー女王は、ワーキングトン(Workington)に上陸し、コーカーマウス(Cockermouth)に移動し、そこからカーライル城(Carlyle Castle)に移動した。その城に少しの間監禁され、その7月にメアリー女王は、ヨークシャーにあるヘンリー・スクロプ(Henry Scrope, 9th Baron Scrope of Bolton)³⁰(1534年生?-1592年没)のボルトン城(Bolton Castle)に彼女の召使いと共に移動し、そこで半年間の監禁生活を送り、その後、6代シュルーズベリー伯ジョージ・タルボト(George Talbot, 6th Earl of Shrewsbury)³¹(1528年生-1590年没)のタトビューリー城(Tutbury Castle)に移され、監禁生活をした。この間に、1569年に北部の反乱が起こり、メアリーは中部のコベントリー城(Conventry Castle)に移動した。1570年に6代シュルーズベリー伯によってダービシャーのチャッツワース城(Chatsworth Castle)に匿われ、その後の14年間、彼女は北部のシェフィールド城(Sheffield Castle)で生活し、そして最後にピータバラ西方のフォザリングレイ城(Fotheringhay Castle)に移り生活した。その間、メアリーは、イングランド王位に正当な継承権があることを主張したばかりではなく、エリザベス女王を廃位する陰謀に関与し、幾多の事件を起こした。イ

²⁹ 4代ボスウェル伯は、スカンジナビアに逃れ、メアリー女王のための軍を用立てるつもりであったが、ノルウェイの海岸で捕らえられた。その後、デンマーク王フレデリクII世のもとに送られ、ドラグスホルム城(Dragsholm Castle)に入れられ、鎖に繋がれ、そこで他界したと思われる。

³⁰ 彼は、1559年のリース包囲戦の軍の司令官であった。

³¹ 彼は、若いときには軍人であり、サマーセット公がスコットランドを侵攻したとき、活躍した。彼は、スコットランドの女王メアリーがイングランドに逃れてきたとき、彼女の看守役にエリザベス1世によって選ばれた。彼は、18年間にわたってメアリーの看守を務めた。

ングランドのエリザベス1世は、メアリーを保護し、彼女を幽閉するでもなく自由にさせるでもなったが、スコットランドのメアリーは、イングランド王ヘンリー7世の曾孫であったので、メアリーの方が、カトリック教会によって私生児とされたエリザベスよりも正当な王位継承者であったと思われた。

1569年11月4日に7代ノーザンバーランド伯トマス・パーシー (Thomas Percy, 7th Earl of Northumberland)³² (1528年生-1572年没) とウェストモーランド伯チャールズ・ネヴィル (Charles Neville, 6th Earl of Westmorland) (1534年生-1601年没) は、エリザベス女王のカトリック迫害に不満を懐き、エリザベス女王に代えて捕らわれていたメアリーを解放し王位に就けることを目指し、反乱を起こした(北部の反乱)。彼らは、ローマ教皇に手紙でアドバイスを求めたが、その手紙が教皇に届く前に反乱を起こす羽目になった。その12月に両伯爵はスコットランド王国に敗走した。この反乱は12月16日に首謀者達がスコットランド王国に逃亡したことで終了した。スコットランドに逃亡したパーシーは、スコットランドのモートン伯に捕らえられ、3年後に2,000ポンドと引き替えに戻れて、その後処刑された。その他に700名が反逆罪で処刑された。ネヴィルは、スコットランドからフランドル地方に逃亡し、そこで貧乏生活を強いられた。

また、1570年にはリドルフィ事件 (Ridolfi plot) (1570年) が起こった。これは、フローレンスの銀行家で熱心なカトリック教徒であったロベルト・リドルフィ (Roberto di Ridolfi) (1531年生-1612年没) によって企まれた陰謀事件であった。彼は、エリザベス女王を殺害し、カトリック教徒の4代ノーフォーク公トマス・ハワード (Thomas Howard, 4th Duke of Norfolk) (1536年生-1572年没) とメアリーを結婚させ、メアリー女王を擁立することを計画した。彼は、1571年にブリッセルでオルバー (アルバ) 公 (Duke of Alba) (1507年生-1582年) やローマで教皇ピウス5世 (Pope Pius V) (1504年生-1572年没) やマドリッドでスペイン国王フェリペ2世に会って、彼の計画を話し、協力を得るために説明した。この計画では、アルバ公がネーザランドから10,000の兵で北部貴族の反乱を支援し、エリザベス1世を殺害し、メアリーと4代ノーフォーク公を結婚される手筈になっていた。しかし、その計画は、エリザベスの情報網のために、事前に押さえられ失敗した。リドルフィは海外にいてイングランドに戻らなかったが、4代ノーフォーク公トマス・ハワードは1572年6月に処

³² 彼は、アン・ブーリンと恋仲になった6代ノーザンバーランド伯ヘンリー・パーシー (Henry Percy, 6th Earl of Northumberland) (1502年生?-1537年没) の甥であった。また、彼の父親は、恩寵の巡礼 (Pilgrimage of Grace) の指導者として Tyburn で処刑された。彼は、カトリックであったが、エリザベス1世に寵愛され、北部地域の監視を委され、1563年にはガーター勲章を授けられた。しかし、カトリック教徒の迫害が一般的になり、彼の立場を悪くしたときに、エリザベス1世が破門されるという噂によって動かされ、反乱を起こした。

刑され、メアリーはリドルフィとの関係を認めたが、その事件への関与を否認した。エリザベス1世は、メアリーの処刑を拒否したが、彼女の王位継承を剥奪する議会议案を認めた。メアリーのイングランド王になる夢は実現しなかった。陰謀の張本人であったリドルフは、陰謀が事前に発覚したとき、海外にいたので逮捕を逃れた。

ローマ・カトリック教徒による陰謀では、自宅に軟禁されているメアリー女王を解放し、彼女をエリザベス1世に代わり国王にし、カトリック教をイングランド王国に再興することが計画された。これは1583年におこった。フランシス・スロックモートン(Francis Throckmorton) (1554年生-1584年没)は、メアリー女王とスペイン王フェリッペ2世(Felippe II) (在位1556年-1598年) (1527年生-1598年没)の大使ベルナーディオ・ド・メンドーザ(Bernardio de Mendoza) (1540年生-1604年没)の間での交信の仲介をしていた。この陰謀と機を同じくしてフランスのギーズ公アンリー1世がスペインとローマ教皇の後押しでイングランドを侵攻する手筈になっていた。スロックモートンは捉えられ、拷問によって関与を自白させられた。1584年に彼は大逆罪で処刑された。

メアリーは、バビントン事件(1586年)の翌年1587年に処刑された。この事件は、カトリックのアンソニー・バビントン(Anthony Babington)³³ (1561年生-1586年没)等によってエリザベス女王の暗殺が謀られた事件であった。メアリーは、バビントンからの手紙に答えてその事件に同意していた。これが、メアリーがエリザベス女王の暗殺に関与した証拠となり、彼女の処刑が確定した。彼は、1580年頃に、大陸を旅行中にメアリーの秘書で陰謀家のトマス・モルガン(Thomas Morgann)³⁴ (1546年生-1606年没)とチャールズ・パジェント(Charles Pagent)³⁵ (1546年生-1612年没)に会った。バビントンは、モルガンにシュルーズバリー一家に拘束中のメアリーに手紙を出すように勧められた。しかし、その仕事を進める中でバビントンは、上手くいきそうもないと思い、フランスに亡命しようとした。彼の亡命を手助けす

³³ アンソニー・バビントンは、ダービシャーのDethick(デチック)でカトリックの家庭に生まれた。彼は、6代シュルーズバリー伯ジョージ・タルボット(George Talbot, 6th Earl of Shrewsbury) (1528年生-1590年没)の従僕であった。6代シュルーズバリーは、メアリーの看守であった。6代シュルーズバリーの屋敷でバビントンは、イングランド王位の継承者であるというスコットランド女王メアリーの主張の支持者であった。

³⁴ 頑固なカトリックで、若いときグラスゴー大司教の秘書であった(1568年まで)。その後、シュルーズバリー卿のために働いた。彼はパリにスコットランド大使として送られ、イングランドにいるメアリーとの間で秘密の文通をし、エリザベス女王の暗殺を計画した。また、チャールズ・パジェントとともにアンソニー・バビントンに会い、彼を新しい仲間にした。しかし、彼らの大使館にはスパイのギルバート・ギフォードがいた。ギフォードはモルガンとメアリーの間で交わされた全ての手紙を複写し、それをフランシス・ウォルシンガムに渡していた。手紙は暗号で遣り取りされていたが、その解読はトマス・フェリッペ(Thomas Phelippes) (1556年生-1625年没)によってなされた。

³⁵ 熱心なカトリックで、イングランド政治家の息子であった。1559年にカーズ(Caius)カレッジからケンブ

る人物として紹介されたのは、エリザベス女王のスパイ隊長フランシス・ウォルシンガム (Francis Walsingham) (1532年生?-1590年没) の手先のロバート・ポーリー (Robert Poley) (1555年生?-1601年没) であった。そのポーリーによってバビントンがエリザベス暗殺に深く関わっていることがウォルシンガムに報告された³⁶。そして、1568年8月に、彼は、他の13人の共謀者と共に捕らえられロンドン塔に収監された。彼らは大逆罪で有罪とされ、絞首刑にされ、内蔵を引き出され、四つ裂きにされ、晒された。捕らえられた他の13人の中には、宣教司祭のジョン・バラード (John Ballard)³⁷ (1586年没)、チディオック・ティチボーン (Chidioc Tichborne)³⁸ (1558年生-1586年没) などがいた。バラードは、エリザベス女王の暗殺計画を扇動し、スペインに指揮されたカトリック軍がイングランドを侵攻する陰謀を計画したが、その計画を初めから知っていたエリザベス女王のスパイ隊長のフランシス・ウォルシンガムによってその計画は阻止された。実際には、この事件は彼によってメアリーを失脚させるために仕組まれた事件であった。

むすびにかえて

本稿では、スコットランドの16世紀中頃の宗教改革前夜とそこを取り巻くイングランド王

リッジ大学に入学した。学位を取ることなく大学を去った。1581年ごろにイングランドでの宗教迫害を避けてフランスに行った。メアリーのフランス大使ジェイズム・ビートンの秘書官になった。彼は、ウォルシンガムの手下で二重スパイであった。また、彼はメアリーの文通者の一人で、彼に差し出した1586年7月17日付け手紙がメアリー審理の証拠とされた。メアリーがエリザベス女王の暗殺に関わった証拠とされた。

³⁶ ウォルシンガムの下には、二重スパイにされた宣教司祭がいた。ギルバート・ギフォード (Gilbert Gifford) (1560年生-1590年没) は、recutant カトリックの家庭で育ち、1577年に Douai (ドゥエイ) 神学校で教育を受け、宣教司祭になることを希望していた。彼は、1585年10月に、パリでトマス・モーガンに会った。イングランドの東サセックスのライ (Rye) 港に渡ったとき、捕らえられ、ウォルシンガムの尋問を受けるためにロンドンに送られた。取調中に彼は二重スパイとして働くことに同意した。彼は、囚われの身であったメアリーに会って、信頼され、彼女に届けられるあるいは彼女の差し出す暗号化された手紙を密輸する役割をした。その手紙は密かにウォルシンガムに渡された。暗号が解かれ、バビントンやその共謀者の逮捕さらに処刑に至った。

³⁷ バラードはイエズス会司祭であった。彼は、ケンブリッジのキャサリン・カレッジに入り、キーズ・カレッジに移り、フランスのライムのイングリッシュ・カレッジで勉強した。1585年にカトリックの使命をもってイングランドに戻った。そして、バビントンと協力し、エリザベスに変えてメアリーを王位に就ける工作を練ったが、その計画は相手役のバーナード・モードに通じてウォルシンガムに筒抜けであった。1586年に捕らえられ、ロンドン塔に閉じこめられ、荷物ソリに縛られ、馬に引かれ、ロンドンの通りを引かれ、処刑台まで引かれた。そこで、吊され、引き裂かれ、四つ裂きされ、晒された。

³⁸ 彼は、サザンプトンでローマ・カトリックの家庭に生まれた。1586年6月に彼はバビントン事件に参加することに同意した。それは、二重スパイのポーリーなどを手下として使うウォルシンガムによって妨害され、彼は、1586年8月14日に逮捕され、審理され、死刑を宣告された。9月20日に彼はバビントンやバラードと共に死刑にされた。彼は、吊され、内蔵を引き出され、四つ裂きにされ、体の部分は晒された。

国とフランス王国の状況の概観を通じて、国際情勢の中でスコットランド王国がイングランド王国とフランス王国に翻弄されながらも、自国のアイデンティティを求め模索した国王メアリー女王の統治を概観した。チューダ朝に入り、ヘンリー7世の治世下での経済力の伸展やヘンリー8世のフランス征服戦略によってイングランド王国による一体化攻勢が復活し、エドワード6世、エリザベス1世の治世下でもスコットランドとイングランドの統合への動きは進められた。スコットランド女王メアリーのイングランド逃亡後のイングランドでのカトリック教徒によるエリザベス1世の暗殺陰謀を概観し、エリザベス1世による宗教政策を通して両王国の一体化が静かに深く進行したことをみた。その後も1603年の同君連合さらに1707年の議会合同と両王国の一体化は進められた。

参考文献

- マックス・ウェーバー 著 (大塚 久雄訳) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 1989年1月
リンダー・コリー 著 (川北 稔監訳) 『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版会 2000年9月
スマウト, T. C. (木村 正俊監訳) 『スコットランド国民の歴史』原書房 2010年11月
A. L.モートン (鈴木亮・荒川 邦彦・浜林 政夫訳) 『イングランド人民の歴史』未来社 1976年
森 護 著 『スコットランド王国史話』大修館書店 1996年12月
森 護 著 『英国王室史話』大修館書店 1988年7月
David Ross, *Scotland: History of A Nation*, Lomond Books 1998年
(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論専攻)